

早稲田大学 教育学部
2022年度 入試問題の訂正内容

<教育学部 一般選抜>

【国語】

●問題冊子12ページ：(三) 問題文 後ろから5行目

(誤)

よそへつつ・・・

(正)

「よそへつつ・・・

※行頭に鍵かっこを付す

以上

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

生政治とは、生（生活／生命）に関わる事柄、生きること、生まれること、死ぬこと、生活することのすべてが、政治の対象となり、生全体が「政治化」してゆくことを指している。はじめに、ミシェル・フーコーが『知への意志』以来行つた近代統治に関する研究の中で、生政治をどのように規定しているかを見ておこう。

「これ（生政治）は、「人口」を、共存する生き物の総体として扱おうとする。特殊な生物学的・病理学的特徴を示し、そのため特定の知と技術に属する総体として扱うということだ。そして、この「生政治」そのものが、早くも一七世紀に発展した国家の力の管理というテーマのうちに含まれていたにちがいないのである」。

この文章は生政治が生物学的総体としての人口を扱うという部分と、その系譜を一七世紀における国家の力の管理というテーマにまでさかのぼれるという部分の二つに分けることができる。そこでまず、フーコーが生政治の展開の土壌と見なす一七世紀における国家の力の管理について検討する。

フーコーによると、近代国家権力は「全体的かつ個別的」なしかたで働きかけることにその特徴がある。

一六一一七世紀に盛んであった国家理性論と呼ばれる政治理論の中で、国家の力をいかに強め、維持するかが主題となっていた。そこでは国家全体の富や豊かさの増大、国家の力の増大は、その中に生きる個人の幸福や健康な生と結びつけられた。これは、近代国家が個人を犠牲にしてその力を蓄えたことを意味するのではない。むしろここでフーコーが問題としているのは、全体と個の利害を結びつけ、国家の力と個人の幸福とが相関して増大したり減少したりするようなしかたで両者を同時に生み出す、知と権力の枠組みである。

たとえば、健康で衛生的な生活を送ることは、個人にとつて幸福であると同時に、公衆衛生や都市の秩序形成に役立ち、また国家の経済的生産性を高めることにも寄与する。そしてこれが単にイデオロギーとして唱えられるのではなく、公衆衛生のための医療の展開や都市計画の徹底など、さまざまな装置を用いた身体への働きかけを伴うことで、個人と国家の健康管理を実現してゆく。こうした個と全体の近代特有の結合を最初に構想した政治理論として、国家理性論が位置づけられるのである。ここで国家理性論は、国家とは何か、その繁栄と秩序維持のために必要な事柄とは何かという問題設定と、個人とは何か、その幸福と安定した生のために必要な事柄とは何かという問題設定とを不可分に結びつけ、その意味で全体と個を同時に対象として構成する知のあり方と見なされている。

そして、国家理性論に見られるような全体と個、国家の繁栄と個人の幸福との結合という問題構成上に、その手法の一つとして生政治が位置づけられるのである。生政治が対象とする、集合体に固有の次元である「人口」について述べておく。生政治とは、すでに引用した部分で述べられているとおり、人口を対象とする政治である。ではここで「人口」とは何か。「それは単に多くの人間からなる集団ではない。生物学的な過程と法則によって貫かれ、制御され、支配された生ける者である。人口は特定の出生率、死亡率、年齢構成曲線、年齢分布図、健康状態を有し、また危機に瀕したり発展したりする」。したがって population は、ある特定地域に居住する人口（住民）を意味するとともに、年齢や階層別に分類される人の集合であり、また統計上の母集団、一定地域に生息する生物個体群をも意味する。こうした人口という対象、国家を構成する個人の単なる総和には還元しえず、また人工的構成物である「主権国家」とも異なる、風土、住環境の生物学的条件、人々の相互交通など、社会に固有の「自然性」によって構成される人口という対象の発見あるいは発明が、生政治を可能にしている。

この「人口の発見」は、近代思想史や近代の法・政治概念を再考する上で示唆に富むものだが、ここでは後の議論との関係で、統計学および医学との関わりを中心に説明しておく。集合体を人口として捉えるための技術、手法として、近代における統計学および人口統計学の発展を見落とすことはできない。国家理性論の中で定式化された国家の力の管理という問題系の中から、国家が有する富を物質的に、かつ量に還元して計測する手だてとして、一七世紀以来統計学が発達してきた。なかでも、一定地域に居住する住民の死亡者数や出生者数、また病

気や疫病、事故など、死因に関する統計データの蓄積は、公衆衛生を有効に機能させるといふ要請に応え、公衆衛生としての医療の発展をもたらすのに役立った。

そして、はじめは数字の数え上げ（政治算術）か国家の状態の記述（国情学）でしかなかった統計学は、一八一―九世紀にかけて、さまざまな数字の間の関連づけや年次推移の比較などを通じて、ここでフーコーがいう「人口」に当たるものを発見してゆく。統計学の発展は、単なる個人の総和ではなく、また法令などによって外部から直接規制可能な単純な集合体でもなく、有機体のような複雑さと固有の規則性を有する実体としての人口という認識を促したのである。

それによって、それまで要素である個とその単純な和としての国家全体という二つのレベルでしか考えられなかった国家による管理の対象に、集合体に固有のレベルである人口という新しい次元がつけ加わる。これ以後、国家統治はこうした意味での集合体、すなわち「社会」を、要素としての個人に分解することなくそれ自体として扱い、社会を調整することを目指すようになる。したがって、「全体的かつ個別的」な近代統治のあり方の一つとしての生政治における「全体」とは、固有の規則性・自然性を有するものとして認識された社会および人口を指している。この新しい「全体」の発見によって、人間の生のあり方に積極的に介入する権力は、ますます複雑で多様な生の実情に合わせた管理を行うことができるようになるのである。

つぎに、こうした集合体としての人口というレベルを対象化し、それを管理し調整しようとする生政治が個人をどのように扱うかについて、一九世紀に頻繁に用いられた「正常性」という概念を手がかりに考察してゆく。フーコーは生政治が展開する時代を、ノルム化が進展する時代、ノルムが法を凌駕する時代と規定している。では、ここでノルムとは何を意味するだろう。彼は近代医療の歴史について考察する中で、ノルム社会では「社会を支配するのは法典ではなく、正常と異常のたえざる分割であり、正常性の体系をつねに再構築しようとする試みである」と述べている。こうした正常と異常の分割、とくに医学において正常なものと病理的なものを区別する「尺度」への注目は、フーコーがカンギレム注から受け継いだものである。「ノルム」の語は規範と訳されるように、法規範と同義に用いられる場合もある。しかし、カンギレムの近代医学・生理学の概念史におけるのと同様、ここでのノルムは法規範一般とは区別される「正常性」に関わる。そしてさらにこの「正常性」は、カンギレム自身『正常と病理』の中で考察を加えているとおり、医学のみならず統計学に関係している。フーコーは統計学―医学―正常と異常―生政治の間の関係を掘り下げて考察していないが、他の文献も参照しつつこれについて整理しておく。

4 生政治の展開の中で、ある人口の出生率と死亡率、生殖能力や罹病率ひびょうなどの全体が、「経済や政治の多くの問題と結びつけられ」（フーコー）重視されるようになった。これらのデータの集積・分析は統計学の発達によって可能となり、また逆に人口に関わる統計需要の増大は、統計学の技術的、理論的な発達を促した。その統計学が、人口レベルでの生の管理のための公衆衛生医療に不可欠な医事統計を發展させたのであり、「マスとしての人口の管理・調整」を準拠点として、統計学、医学、生政治は一連のつながりを有している。

ここで、正常性は人口レベルでの統治の基準、尺度となる。というのは、社会の大量現象における「率」の一定性（出生率、死亡率、自殺率、犯罪率などの一定性）は、社会に秩序が保たれていることの証左であり、率の激しい変動は、上昇にせよ下降にせよ介入のための指標となるからである。たとえば、出生率が死亡率に比して極端に高い上昇曲線を示している場合には、その上昇を抑える施策が必要かどうか、政治的・経済的目標との関連で検討される。

ここから生じるきわめて重大な帰結について述べておく。フーコー自身は明確には論じていないが、こうした人口や社会というマスのレベルでの正常性を指標とする管理が、人口を構成する個人のレベルに容易に転化することに注目すべきである。このことはたとえば、社会統計学の創始者の一人であるケトレの「平均人」概念の中に端的に見て取ることができる。ケトレ（一七九六―一八七四）は、兵士の身長計測などの結果得られる山型カ

ーブの「理念型」が正規曲線（ノーマルカーブ）となることを示し、曲線の中央の最も山が高くなる位置に来る人間を「平均人」と名付けた。そして、平均人を規範的な存在、理想の人間像として提示し、そこから離れることを規範からの隔たりと同一視した。ここで正常性≡平均≡規範的状态は、現実社会の外にある超越的な規範（たとえば自然法）によって根拠づけられることはなく、特定の社会におけるデータ計測に基づいて得られる数値自体のうちに含まれる。これによって、規範が現にある社会に内在化されるとともに、個人の正常性からの逸脱の度合いが数値によって測定され、それにしたがって分類、階級づけられるようになる。個人はその人が属する社会のどこかに必ず位置を占める。したがって、規範の社会への内在化と数値による計測は、どんな逸脱をも数字に還元して把握できるようにする、⁶「外部のない秩序」を可能にするといえる。

⁷ 社会統計学が当初から遺伝学や優生学と結びつき、生物として見た人間の正常／異常の分類への関心を併せ持っていたのは決して偶然ではない。正常と異常、正常と病理といった問題系は、統計学のみならず、医学・生理学、生物学、遺伝学、精神医学、犯罪学など多くの分野にまたがっている。もちろん「正常であること」の概念化のされ方はそれぞれの分野に応じて異なるが、それらが正常性からの逸脱の度合いという尺度で個々人の位置を定めるという共通性を持っている。それらが互いに緩やかなつながりを保ちつつ、「正常と異常に関わる人間科学」を発展させていったことに注目すべきである。

社会全体のレベルでの正常性と、その社会を構成する個人の正常性とがこのように結びつけられることは、生政治と、フーコーが『監獄の誕生』で詳細に分析した、「規律権力」との関係にも示唆を与えてくれる。個人の身体、所作、行動、身振りを細かい規則に合致するように監視し訓育する規律のテクノロジーは、社会全体のレベルでの正常性の構成要素としての個人の正常性という規範・尺度を与えられ、正常な個人を作り出す技術として利用されるからである。

（重田園江『フーコーの風向き』による）

（注）カンギレム：フランスの科学哲学者、一九〇四年～一九九五年。

問一 傍線部「一個と全体の近代特有の結合」とあるが、どういうことを指しているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 国家と個人の利害の結びつきを前提とすること。
- ロ 国家が個人も幸福になるような理論を構築すること。
- ハ 国家の力を増大させるために個人の幸福を実現すること。
- ニ イデオロギーよりも具体的な政策として国家が個人を管理すること。
- ホ 国家の力と個人の幸福とが同時に増大または減少するようにすること。

問二 傍線部2「社会に固有の「自然性」によって構成される人口という対象の発見あるいは発明が、生政治を可能にしている」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 生政治は出生率や死亡率などの人口構成に関わる数値と不可分の関係にあるが、それは遺伝学や優生学の影響を受けるので、容易に個人のレベルの問題に還元され得ることによって可能となっているから。

ロ 生政治の目的は国家の力の元になる公衆衛生の向上にあったので、人々の生活に即した実態としての人口が重要で、それを数字で表すことができる人口統計学の発明で人々の生活に即した国家権力を行使できるから。

ハ 生政治とは人間が生きることそれ自体に関する政治なので、単なる個人の集合としての全体の数字ではなく、人間が生きることに関わる様々な側面に即した数値に分けることによって人々をきめ細かく統治できるから。

ニ 生政治は国民を統治するには全体的かつ個別的に人々に働きかけることが求められるとする国家理性論を元にしてはいるが、それには全体と個別を同時に計測できる人口統計学がなければならず、それは一七世紀以降に可能になったから。

ホ 近代以前は統計学が発達だったので、地域ごとの特質を反映させた数字を人口と捉えることができず、人々にとって特に重要な公衆衛生を国家の問題として発見できなかったが、その後の人口統計学の発展によって生政治が行えるようになったから。

問三 傍線部3「フーコーがいう「人口」に当たるもの」とあるが、それは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 政治組織としての国家。

ロ 国家の一部としての地域。

ハ 人々を人口として見た全体。

ニ 特定の集合体としての社会。

ホ 人口学によって見いだされた個人。

問四 傍線部4「生政治の展開の中で、ある人口の出生率と死亡率、生殖能力や罹病率などの全体が、「経済や政治の多くの問題と結びつけられ」（フーコー）重視されるようになった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人口を一定に保つためには、出生率と死亡率、生殖能力や罹病率などを規範に合わせなければならないと考えられていたから。

ロ 出生率、死亡率、自殺率、犯罪率こそが社会秩序を不安定にするので、正常性を基準とすることでそれらを一定に保てると考えられていたから。

ハ 国家にとっては人口構成が一定であるのが望ましいので、出生率と死亡率、生殖能力や罹病率が変動しないようにすべきだと考えられていたから。

ニ 国家にとって人口構成は最重要項目なので、その変動要因となる数値をコントロールすることで人口を望ましいレベルに管理できると考えられていたから。

ホ 生政治では、たとえば人口構成を出生率と死亡率、生殖能力や罹病率などの様々な数値を一定の値に保つことで国民を統治しやすくなると考えられていたから。

問五 傍線部5「規範が現にある社会に内在化されるとともに、個人の正常性からの逸脱の度合いが数値によって測定され、それにしたがって分類、階級づけられるようになる」とは究極的にはどういう事態を招く可能性があるだろうか。それを説明した次の文の空欄に入る言葉として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

人々が平均的であることがもつとも優れた状態だと信じることで、様々な を生む。

イ 個性 □ 差別 ハ 序列 ニ 優劣 ホ 落差

問六 傍線部6「外部のない秩序」を可能にする」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 平均値から外れた人を超越的な規範によって位置づけること。

□ 平均人ではないとしても、秩序のない外部に位置づけてしまうこと。

ハ 平均人以外の人を、秩序を乱す存在として社会の外部に排除すること。

ニ 平均人でない人のある社会に特有な数値によって超越的な存在とみなすこと。

ホ 平均値からずれた人をも特定の価値観によって社会に位置づけてしまうこと。

問七 傍線部7「社会統計学が当初から遺伝学や優生学と結びつき、生物としてみた人間の正常／異常の分類への関心を併せ持っていたのは決して偶然ではない」とあるが、なぜ「偶然ではない」と言えるのか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 社会統計学は、個人を平均的な数値に当てはめようとするから。

□ 社会統計学が、社会の秩序は生物としての人間の優劣によって保たれると信じていたから。

ハ 社会統計学は、国家が政治的・経済的・最大の達成のために個人を利用することが目的だから。

ニ 社会統計学が、人口の発見だけではなく、平均的な人間をつくるという問題意識と結びついていたから。

ホ 社会統計学が、一六―一七世紀のさまざまな科学を総合して人間の学としての地位を築こうとしていたから。

問八 「人口」という概念は、本文で論じられている以外にも問題を生み出す可能性がある。それを説明した次の文の空欄に入る言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

人口を調査するときに、肌の色、性別、年齢等、人間をその によって分類することが多い。これは差別の誘因となる可能性がある。

イ 経歴 □ 出自 ハ 属性 ニ 平均 ホ 本質

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人間を包み込むカミの实在を前提とする前近代の世界観は、そこに生きる人々の死生観をも規定していた。わたしたち現代人は、生と死のあいだに明確な一線を引くことができると考えている。ある一瞬を境にして、生者が死者の世界に移行するというイメージをもっている。だがわたしたちにとって常識となっているこうした死生観は、人類の長い歴史のなかでみれば、近現代にだけみられる特殊な感覚だった。

前近代の社会では、生と死のあいだに、時間的にも空間的にもある幅をもった中間領域が存在すると信じられていた。呼吸が停止しても、その人は亡くなったわけではない。生と死の境界をさまよっていると考えられたのである。

その期間の周囲の人々の言動は、背景にあるコスモロジーと死生観に強く規定された。日本列島についていえば、身体から離れた魂が戻れない状態になったときに死が確定すると考えられていた古代では、遊離魂を体内に呼び戻すことよって死者を蘇生させようとする試みがなされた。不可視の理想世界（浄土）^aが人々に共有される中世になると、死者を確実に他界に送り出すことを目的とした追ゼン^aの儀礼が行われた。死者が遠くに去ることなく、いつまでも墓場に住むという感覚が強まる近世では、亡者が現世で身にまとった怒りや怨念を振り捨て、穏やかな祖霊へと上昇していくことを後押しするための供養が中心となった。

前近代の社会では、生と死が交わる領域は呼吸が停止してからの限られた期間だけではなかった。生前から、死後の世界へ向かう助走ともいべきさまざまな儀礼が営まれた。死が確定して以降も、長期にわたって追ゼン^a供養が続けられた。生と死のあいだに一定の幅があるだけではない。その前後に生者の世界と死者の世界が重なり合う長い期間があるという認識が、前近代の人々の一般的な感覚だった。

¹ 生者と死者は、交流を続けながら同じ空間を共有していた。生と死そのものが、決して本質的に異なる状態とは考えられていなかったのである。

こうした前近代の死生観と対比したとき、近代が生と死のあいだに A 不可能な一線を引くことよって、生者の世界から死を完全に排除しようとした時代であることが理解できるであろう。

いまの日本では死は周到に隠^bべいされ、人間でも人以外の動物でも、生々しい死体を直接目にする機会はほとんどなくなってしまった。普段の食事で、牛や鳥や魚の死体を口に運んでいるという感覚を持つことはまずありえない。だれもが死ぬという当たり前の事実すら、公然と口にする^cことを憚^{はば}る風潮がある。

いったん人が死の世界に足を踏み入れてしまえば、ア^cワ^cただしい形式的な葬儀を終えて、親族はただちに日常生活に戻ってしまう。別世界の住人であるがゆえに、死者はもはや対等の会話の相手とはなりえなかった。²死者側の能動性は失われ、生者による一方的な追憶と供養の対象と化してしまうのである。

かつて人々は死後も縁者と長い交流を継続した。それは、やがて冥界で先に逝った親しい人々と再会できるといふ期待に裏打ちされた行為だった。それはまた、自分自身もいつかは墓のなかから子孫の行く末を見守り、折々に懐かしい家に帰ってくつろぐことができるという感覚の共有にほかならなかった。「^注供養絵額」や「ムカサリ絵馬」のように、死者の世界を可視的に表現した記憶装置も数多く作られた。

死後も親族縁者と交歓できるという安心感が社会のすみずみまで行き渡ることよって、人は死の恐怖を乗り越えることが可能となった。そこでは死はすべての終焉^{しゆうえん}ではなく、再生に向けての休息であり、生者と死者との新しい関係の始まりだった。死はだれもが経験しなければならぬ自然の摂理であることを、日々の生活のなかで長い時間をかけて死者と付き合うことよって、人々は当たり前のこととして受け入れていたのである。

しかし、死者との日常的な交流を失った現代社会では、人間の生はこの世だけで完結するものとなった。死後世界はだれも足を踏み入れたことのない闇の風景と化した。ひとたび死の世界に踏み込んでしまえば、二度とわが家に帰ることはできない。親しい人、愛する人にも、もはや会うことは叶^かわないのである。

宮城県で長年にわたって緩和ケアの仕事に従事し、二〇〇〇名の患者を看取った故岡部健医師は、みずからがガンになって死を意識したときの心境を、次のように語っている。

がん患者になったとき、B を歩いている気分だった。(中略) 晴れ渡った右の生の世界には、やれ化療療法だ、やれ緩和医療だ、やれ疼痛管理だとか、数えきれないほどの道しるべが煌々と輝いていた。

ところが、反対側の死の世界に降りていく斜面は、黒々とした闇に包まれ、道しるべがひとつもないのだ
『奥野修司』看取り先生の遺言』文藝春秋 二〇一三』。

近代人にとって、死は現世と切断された孤独と暗黒の世界だった。死がまったく道標のない未知の道行であるゆえに、人は生死の一線を越えることを極度に恐れるようになった。どのような状態であっても、患者を一分一秒でも長くこちら側の世界に留めることが近代医学の使命となった。いま多くの日本人が生質を問うことなく、延命を至上視する背景には、生と死を峻別する現代固有の死生観があるのである。

これまで述べてきたように、近代社会の特色は、この世界から人間以外の神・仏・死者などの超越的存在Cを、他者としてC してしまったところに求めることができる。

中世でも近世でも、人と死者は親密な関係をたもっていた。神仏もはるかに身近な存在だった。近現代人は「世界」といった時に、あるいは「社会」といった時に、その構成員として人間しか頭に思い浮かばない。しかし、中世や近世の人々の場合は違った。そこでは人間だけではなく、神・仏・死者・先祖など、不可視のカミをも含めた形でこの世界が成り立っていると考えられていた。

動物や植物も同じ仲間だった。カミはときには人間以上に重要な役割を果たす、欠くべからざる構成員だった。人がカミの声を聞きその視線を感じ取っていた時代の方が、人類の歴史のなかでは圧倒的に長い期間を占めていたのである。

ヨーロッパ世界から始まる近代化の波動は、公共圏から神や仏や死者を追放するとともに、特権的存在としての人間をクローズアップしようとする動きだった。これは人権の観念を人々に植え付け、人格の尊厳の理念を共有する上できわめて重要な変革だった。近代に確立する人間中心主義としてのヒューマニズムが、社会の水平化と生活者の地位向上に果たした偉大な役割は疑問の余地がない。

しかし、他方³でこの変動は深刻な問題を惹き起こすことになった。カミが公共空間を生み出す機能を停止したことに伴う人間間、集団間の緩衝材の消失であり、死後世界との断絶だった。その結果、絶海の無人島の領有をめぐって国民間の敵愾心が高揚するような異様な時代が到来した。かつてのように親族が重トク者を取り囲んで見守り、その穏やかな臨終と死後の安息を祈る光景は姿を消し、生命維持装置につながれた患者が、本人の意思にかかわりなく生かされ続けるような姿が常態化することになったのである。

およそこれまで存在した古今東西のあらゆる民族と共同体において、カミをもたないものはなかった。信仰の有無にかかわらず、大方の人にとってカミはなくてはならない存在なのである。

わたしたちが大切にしている愛情や信頼も実際に目にはできない。人生のストーリーは可視の世界、生の世界だけでは完結しない。たとえそれが幻想であっても、大多数の人間は不可視の存在を取り込んだ、生死の双方の世界を貫くストーリーを必要としている。

かつて人々は神仏や死者を大切な仲間として扱った。目に見えぬものに対する強いリアリティが共同体のあり方を規定していた。それゆえ、わたしたちが前近代の国家や社会を考察しようとする場合、その構成要素として人間を視野に入れるだけでは不十分である。人を主役とする従来の欧米中心の「公共圏」に関わる議論を超えて、人間と人間を超える存在が、いかなる関係をたもちながら公共空間を作り上げているかを明らかにできるかどうか重要なポイントとなる。これまでの歴史学の主流をなしていた人間による「神仏の利用」という視点を超え

て、人とカミが密接に関わり合って共存する前近代世界のコスモロジーの奥深くに錘鉛すいえんを下ろし、その構造に光を当てていくことが求められているのである。

(佐藤弘夫『日本人と神』による)

(注) ムカサリ絵馬：山形県村山地方に伝わる、あの世での架空の結婚式を描いた絵馬。

問九 傍線部 a～d (aは二箇所とも同じ漢字が入る) のカタカナを漢字で表現したとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

a 追ゼン

イ 座ゼン □ ゼン処 ハ ゼン途 ニ 修ゼン ホ 雑ゼン

b 隠ペイ

イ ヘイ害 □ 憲ペイ ハ ヘイ塞感 ニ 偏ペイ足 ホ 建ペイ率

c アワただし

イ シン重論 □ 繁ボウ期 ハ 哀トウの辞 ニ 世界恐コウ ホ 絶滅危グ種

d 重トク者

イ 隠トク □ 人トク ハ トク志家 ニ トク促状 ホ 利害トク失

問十 傍線部 1「生者と死者は、交流を続けながら同じ空間を共有していた」とあるが、どうということか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間が死を迎えるには生者たちによる儀式が最優先であり、儀式の中で死者と生者は交信する可能性があるということ。

□ 死と生との境は極めて曖昧であり、最終的にその人間に対してカミが死を宣告するまでは生き返る可能性があるとということ。

ハ 死が一瞬を境とする不可逆なものとしてはとらえられておらず、死者と生者とが互いに影響し合う可能性があるとということ。

ニ 現世と他界との間には明確な隔絶がないために、生者と死者とはそれぞれの存在する空間を入れ替わる可能性があるとということ。

ホ 死者とは、生者と祖霊とを結びつけてくれる存在であり、生存する人間は死者を忘却することで他界に関わる可能性があるということ。

問十一 空欄 A に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 往還 □ 転換 ハ 巡回 ニ 因循 ホ 可逆

問十二 傍線部2「死者の側の能動性は失われ」とあるが、なぜ失われるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 近現代においては、死者は生活から即時に排除されるべきであると考えられているから。
- ロ 近現代においては、死者は生者の記憶にだけ出現する存在であると考えられているから。
- ハ 近現代においては、個人の死が共同体の歴史とは関係を持たないと考えられているから。
- ニ 近現代においては、肉体の死により死者からの働きかけがなくなると考えられているから。
- ホ 近現代においては、生者は科学的思考によって死者の声に感じないと考えられているから。

問十三 空欄 B に当てはまる表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 果てしない海の底 ロ 険しい崖のきわ ハ 濃霧の林の中
- ニ 痩せた山の尾根 ホ 見知らぬ街の路地

問十四 空欄 C に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 崇拜 ロ 放逐 ハ 対置 ニ 無視 ホ 等閑

問十五 傍線部3「他方でこの変動は深刻な問題を惹き起こすことになった」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 近代においては人同士の交流が発展の基盤であるという気付きによって、それまで重要視されていたカミヤ死者も有効に利用されたから。
- ロ 近代においてはカミの意思を具現化するのは人間であるという主張がなされ、その教えを实践する人間をめぐる争いが新たに起こったから。
- ハ 近代においては人間を特権的存在と考え、それまで重要視されていた神仏への配慮を失って、個人生活の充実のために経済が重視されたから。
- ニ 近代においては生存する者が世界を豊かにし得るという考え方が重要視されたので、生きて社会に貢献することがあらゆることに優先されたから。
- ホ 近代においてはカミを排除し、人権を尊重することを優先したために、人同士の間で利害が対立した際に調整する存在を想定することが困難になったから。

問十六 傍線部4「信仰の有無にかかわらず、大方の人にとってカミはなくてはならない存在なのである」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ カミは人間が創造した理想の形であることを現代人が自覚したから。
- ロ カミが歴史上果たした役割は近現代のヒューマニズムを超えているから。
- ハ カミは個人の信仰心の有無を超えてすでに一般社会に広く浸透しているから。
- ニ カミの存在を念頭に置くことで人は自身の中に利他的な思考を育て得るから。
- ホ カミを想定することで人は互い同士や生死の境界を考える公共圏を作り得るから。

問十七 次の中から、本文の趣旨に当てはまらないものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 神仏や死者は、現代の人間にとってすでに畏れる存在ではなく、カミへの信仰心や先祖崇拜は形骸化し、人々の関心からは外れてしまった。

ロ 社会を活性化し、世界の多様な価値観を受け入れて行くためには、神仏が道標であった時代に回帰して、改めて人間を見つめ直すべきである。

ハ 近代におけるカミの存在の空無化は、人間あるいは国同士の利害の対立を激化させ、死を受け入れるための想像力を阻害する結果をもたらした。

ニ 死はすべての終焉ではなく、生と深いかわりを持っているという有史以来の教えは、死に向き合おうとしない現代人にとって、今後の課題となる。

ホ 生命維持装置という科学の産物は、それによって生かされる人間とその恩恵から疎外される人間を峻別し、近代のヒューマニズムを問い直している。

(三)

次の文章は、『夜の寢覚』の一場面である。主人公の大納言と、彼の妻であり、女主人公の寢覚の君（中君）の姉である「かの御方」（大君）との夫婦の会話から始まっている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

大殿には、ことごとなく、この御かしづきを明け暮れしたまふ。御五十日の日を数へて、世の嘗み、響きを、かの御方には聞きたまひて、「かかる人出で来る所もありけるを、知らざりけるよ」と、いとなべて世の中恨めしく、A おぼしたるを見たまひて、大納言は、「ひとりにはべりしほど、ときどきうち忍びつつ通ひし所にかかることのありけるも、知らざりけるほどに、殿に、聞きたまひて、迎へ取りたまへりけるにぞ、見はべる。にくからぬさまのしたれば、いかでか、ひとりも思ひ捨てはべらむ。さるべからむついでに、いかでか見せたてまつらむ。同じ御心におぼせよ」と申したまへど、うち赤みて、年ごろも、おぼしのどめたる上べばかりさりげなくて、世には、もの嘆かしげに、静かなげなる御気色とは見つれど、さしてそのこととなきには、おのづから深くも咎められたまはぬに、姫君迎へられたまひて後、身の宿世つらくおぼし知られて、やすげなき御気色を、「わりなしや。生まれたるほどをおぼせ。我が後かと。たとひさるにても、男はさのみこそはべれ。されど、あよもしはべらじ」ときこえても、あなたうち見やられて、まづものぞあはれなる。

かくのみやすげなく、おぼし恨みたる気色なれど、「などかくおぼすべき。あまたかかづらひ通ふは、世のつねの男の性、なほなほしき際こそ、かかる筋をかく思ふなれ。ふさはしからず」などおぼせば、姫君はた、一日の隔て、昼間のほども恋しくおぼつかなければ、大殿がちにのみなりたまひつつ、枝さしぐめるほどに通ひたまへるを、尋ねうかがはせたまへど、げに、「そこに、その人をおぼす」とも聞かねば、いみじく嘆かしく、弁の乳母の、心焦られ鎮めもあへず思ひ言ふを、こなたには、聞くにも、いとどわづらはしきままに、御返りなどいにとど絶えてなし。おぼつかなく、いぶせて過ぎゆく慰めには、姫君を、ただ明け暮れ抱き見たてまつらせたまふ。宰相の君といふ人の、乳あゆる、御乳母に召したり。

御五十日、百日など過ぎて、この君、目もあやに、日に添へて光を添へおはするさま、あまりゆゆしきを、いとあはれと見つつ、鼠鳴きしかけたまへば、物語をいと高くしかけて、高々とうち笑ひうち笑ひしたまふにほひ「かの石山にて、あるかなきかなりし火影に、いとよく似たりかし」と、まもりたまふに、いと悲しければ、見あまりたまひて、うつるばかり赤き紙に、撫子を折りて包みて、

⁷よそへつつあはれとも見よ見るままににほひにまさるなでしこの花

ただ今御覽せさせばや」などばかり、例のやうに言葉がちにもあらず、優に書きたまへるを、これにも、御前の壺なる、童べ下ろして、草ひきつくるはせて見たまふほどなりければ、例ならず目とどめられたまふに、対の君なども、「いとあはれに思ひやらるる御程なるを、このたびは」と、そそのかしきこゆれど、「いかでか」と、

B、きこえたまはず。

(注) 大殿…大納言の父関白邸。 弁の乳母…大君の乳母。 宰相の君…姫君の乳母。

対の君…大君、中君の従姉妹。 中君の世話役。

問十八 空欄

A

 と空欄

B

 に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ A はかなげに B うつくしげにて
- ロ A あはれげに B ゆかしげにて
- ハ A ものしげに B つつましげにて
- ニ A なめげに B いとほしげにて
- ホ A にくげに B たのもしげにて

問十九 傍線部 a、c はそれぞれ誰に対する敬意をあらわしているか。最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。なお重複するものを選択してもよい。

- イ 大殿（関白）
- ロ 大納言
- ハ かの御方（大君）
- ニ 姫君
- ホ こなた（中君）

問二十 傍線部①～⑤のうち、一つだけ主語の人物が異なるものがあるが、それはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ①
- ロ ②
- ハ ③
- ニ ④
- ホ ⑤

問二十一 傍線部「」としてそのこととなきには、おのづから深くも咎められたまはぬに」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 特にその原因がない以上は、自然に深くもとがめたりなさることはなかったが。
- ロ 特別な事件は起こらなかったたので、それ以上深く非難されてしまうことはなかったが。
- ハ 誰とは思いつたならなかったたので、自然にその人を厳しく非難したりなさらなかったが。
- ニ 何か特に罪を犯したわけではなかったたので、自身を深くも反省はなさらなかったが。
- ホ 二人の間には何もなかった以上は、いつしか世間から深くもとがめられなかったが。

問二十二 傍線部2「わりなしや」、傍線部6「いぶせて」の現代語訳として、最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- I 傍線部2
- イ こわいなあ
- ロ 困るなあ
- ハ 馬鹿だなあ
- ニ 楽しいなあ
- ホ つまらないなあ
- II 傍線部6
- イ 人恋しくて
- ロ わけがわからず
- ハ 夢中になって
- ニ 心が晴れず
- ホ いらいらしながら

問二十三 傍線部3「人の心を折りて、おほし咎むばかりの振舞は、よもしはべらじ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ あなたの心を踏みにじってしまうような、非難すべき行動は、全くないでしょう。
- ロ あの人の心を打ち砕いてしまって、あなたが私を非難するような振舞は、絶対しないつもりです。
- ハ 人間の心を折ってしまって、世間の人から厳しく非難されるような言動は、絶対にしないでしよう。
- ニ あなたの心を踏みにじり、あなたが私を非難するような行動は、まさかしないつもりです。
- ホ 人の心を知らずに折ってしまうような、ただとがめだてなざるだけの振舞は、まさかないでしょうね。

問二十四 傍線部4「なほなほしき」の対義語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ うるはしき
- ロ なつかしき
- ハ つぎづきしき
- ニ やむごとなき
- ホ おどろおどろしき

問二十五 傍線部5「尋ねうかがはせたまへど」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 夫が通う家を尋ねてうかがうことをなさったが。
- ロ 姫君の様子を探って見させることをなさったが。
- ハ 夫が愛している女性を探させることをなさったが。
- ニ 姫君がどこにいるのかを尋ねて探させることをなさったが。
- ホ 心当たりの人を夫に尋ねて様子をうかがうことをなさったが。

問二十六 傍線部7の和歌には掛詞があるが、どこにあるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 初句 ロ 第二句 ハ 第三句 ニ 第四句 ホ 末句

問二十七 傍線部8「なる」とは異なる「なる」「なり」はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆく物は我が身なりけり
ロ 筑波嶺の峰よりおつるみなの川恋ぞつもりてふちとなりぬる
ハ 吹く風の色のちくさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり
ニ ももしきやふるき軒はのしのふにもなほあまりある昔なりけり
ホ 春の夜の夢ばかりなるたまくらにかひなくたたん名こそをしけれ

問二十八 『夜の寝覚』と同じ頃に成立した物語はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 落窪物語
ロ うつほ物語
ハ 松浦宮物語
ニ 有明の別れ
ホ 浜松中納言物語

(四)

次の文章は、北宋・蘇軾の「稼の説（穀物の育て方について）」の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所がある。

盍嘗觀於富人之稼乎。其田美而多、其食足而有¹余。其田美而多、則可²以更休、而地力得全。其食足而有¹余、則種³之常不²後時、而斂³之常及²其熟。故富人之稼常美、少³秕而多²實、久藏而不²腐。今吾十口之家、而共³百畝之田。寸寸而取³之、日夜以望³之、鋤耨銓艾、相³尋於上者如³魚鱗、而地力竭矣。種³之常不²及時、而斂³之常不²待³其熟。此豈能復有³美稼¹哉。

古之人、其才非有以大過今之人也。平居所⁴以自養而不敢³輕用、以待³其成者、閔閔焉如³嬰兒之望³長也。弱者養³之以³至於³A、虛者養³之以³至於³B。三十而後仕、五十而後爵。信³於久屈之中、而用於既足之後、流³於既溢之余、而發³於持滿之末。此古之人所以³大過³人、而今之君子所以³不³及³也。

(注) 秕：中身のつまっていない穀物。 百畝：古代より標準的とされる田畑の広さ。

鋤耨銓艾：土を耕し種まきして土をならし鎌で刈ること。 平居：常日頃。
閔閔焉：心配し気をもむ様。 爵：爵位を得ること。 信：伸と同じ。

問二十九 傍線部1「盍嘗觀於富人之稼乎」の読み方として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ なんぞこころみにふじんのかをみんや。
- ロ なんぞこころみにふじんのかをみざるや。
- ハ なんすれぞこころみにふじんのかをみるや。
- ニ けだしこころみにふじんのかをみるならんや。
- ホ けだしこころみにふじんのかをみるべけんや。

問三十 傍線部2「可以更休、而地力得全」とはどういう意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ かわるがわる休耕にすることができるので、土地も痩せ細らず完全な状態を保てる。
- ロ 休憩と耕作を交互に行えるので、人も耕地も、それぞれ常に十全な状態でいられる。
- ハ おまけに耕作を休むこともできるので、いつでも体力を温存して完璧な耕作ができる。
- ニ たとえ休耕しても、土地の栄養分と労働力はその間に十分回復して完全な状態に戻る。
- ホ さらに十分な休みを取ることもできるので、本来の地力を完全に発揮できるようになる。

問三十一 傍線部3「日夜以望之」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 日夜欠かさず作物の生育に心を配る、あり得べき農家の理想を形容している。
- ロ 日夜欠かさず作物の生育に心を配る、農家としての職業常識を確認している。
- ハ 日夜欠かさず作物の生育に心を配る、作物への最高の慈しみを形容している。
- ニ 日夜欠かさず作物の生育に心を配る、勤勉なる農家の有り様を賛美している。
- ホ 日夜欠かさず作物の生育に心を配る、余裕のない切迫した様を強調している。

問三十二 傍線部4「古之人、……今之人也」は、「昔の人は才能が今の人より大いに優れていたわけではない」という意味である。この意味に沿う返り点として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 古之人、其才非_レ有_レ以大過_レ今之人也。
- ロ 古之人、其才非_レ有_レ以大過_レ今之人也。
- ハ 古之人、其才非_レ有_レ以大過_レ今之人也。
- ニ 古之人、其才非_レ有_レ以大過_レ今之人也。
- ホ 古之人、其才非_レ有_レ以大過_レ今之人也。

問三十三 空欄 A・B にはそれぞれ漢字一字が入る。A・Bの組み合わせとして最も適切なものを

次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ A 毅 B 亡
- ロ A 空 B 滅
- ハ A 強 B 迅
- ニ A 剛 B 充
- ホ A 柔 B 実

問三十四 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 今の人材育成は本人の自発的成長を待つばかりでなく、錬磨の機会を多くして、三十歳過ぎには仕官できるようにするのが一般的である。
- ロ 人材の育成は富裕な農家の耕作に見習うべきであり、可能な限りすべての資材を集約的に投与し、むだなく効果的に行うのが理想である。
- ハ 昔は今と違って理想的な社会であったから、もともと優れた人材を余裕のある態勢でじっくり育成したので、完璧な人材が多数生まれ出た。
- ニ 富裕な農家が余裕をもった耕作するのと同じように、人材も遮二無二促成を目指すのではなく、じっくりと時間をかけて育成すべきである。
- ホ 昔の人が今の人に大きく勝っているのは、何事につけ大らかだったという点であり、今のように目的の早期達成のため手段を選ばないというのと違っている。
- ヘ 今の人材育成方法は、耕地に隙間なく穀物を植えて土地を痩せ細らせるのに類似しており、人が自然に成熟し切るのを待つて採用する昔と大きな違いがある。